



宮城淳さんを偲んで テニスミュージアム設立への思い

テニスミュージアム委員長
吉井 栄



もう40年近く前だろうか、カリフォルニアはサンディエゴにあるLA COSTA RESORT & SPAで行われたプロアマテニスイベントに参加したときのこと。“Do you know Miyagi?”と声をかけてきた男性がいた。“Miyagi, the tennis player? Of course I do.”と応えると嬉しそうにほほ笑んだその人は、“Miyagi”と対戦したことがあると語り出した。“Where?”という私の質問への彼の答えは、なんと“US Open”だった。

1955年、ボストンで行われたU.S. National Championships（現在のUSオープン）の男子ダブルス決勝で、彼はパートナーのWilliam Quillianと共に宮城淳・加茂公成ペアと対戦し、3-6、3-6、6-3、6-1、4-6のスコアで負けたという。彼の名はGerald

Jerry Moss。マイアミ大学時代は2年連続オールアメリカンになり、61年には当時世界ランキング1位だったロッド・レーバーにも勝利した名プレイヤーだ。私が70年代にマイアミ大学テニスチームの一員だったこともあって話は弾み、Jerryは宮城・加茂ペアとの対戦を懐かしそうに語ってくれた。

その後何年かして彼から連絡があり、日本に行くから“Miyagi”に会いたいという。当時ニューヨークに住んでいた私は、出張の予定を調整してJerryと東京で再会。そして、ほぼ30年振りに盟友を引き合わせる大任を果たした。東京ローンテニスクラブでのプレーを楽し

まれたお2人の会話は、いつまでも尽きることがなかった。そのJerryは2008年に亡くなり、そして今年2月に宮城淳氏もこの世を去られた。今頃、17年に亡くなられた加茂公成氏と共に再会を果たし、天国でテニスをされているのかもしれない。

宮城氏の訃報に際し、世界のテニス界がさまざまなコメントを出した。

「宮城は、現在の日本テニス界の開拓者であった」
「第二次世界大戦後、初めてグランドスラムで優勝した日本人選手で、テニス界のレジェンド」

「宮城と加茂は、テニス界における日本の今日を可能とした先駆者だった」

1955年のU.S. National Championshipsは、日本という国の存

在を世界に知らしめただけでなく、錦織圭選手や大坂なおみ選手が活躍する現在の日本テニスのスタート地点だったといえるかもしれない。

テニスが紳士淑女のスポーツだった時代から、68年に起こったプロ化を経て、ビリー・ジーン・キングがボビー・リッグスに勝利して男女平等への道を拓き、ケン・ローズウォール、ロッド・レーバー、ジョン・ニューカム、トニー・ローチが一世を風靡していたところに黒人選手アーサー・アッシュが人種の壁を打ち砕いてスタン・スミスらとアメリカ黄金期をスタートさせた時代。アイスドールともてはやされたクリス・エバートとチェコスロバキアからアメリカに亡命したマルチナ・ナブラ

チロワ、男子はビヨン・ボルグ、ジミー・コナーズ、ジョン・マッケンローが躍動した時代。そして、ウィリアムズ姉妹やフェデラー、ナダル、ジョコビッチ、マレーと肩を並べて活躍する大坂や錦織の登場。

日本テニスが再び世界トップレベルに到達した今、これから世界の頂点を目指す子どもたちのために、改めて日本テニスの軌跡を残す使命を感じている。これからの日本テニス界をリードしていく若者には、宮城氏のような先駆者、そして世界へのチャレンジを続けた日本人選手たちの苦悩と喜び、彼らの生きた時代とその社会的背景を知っ



加茂公成さん(右)と肩を組む宮城淳さん=1954年10月(共同通信提供)

ていてほしい。

それを伝えること、それぞれテニスミュージアムの役割だろう。ミュージアムを「人間界の代表的遺産の収集、保存、伝達、展示を行う社会的施設」と定義したのは、国際美術館会議初代議長のリヴィエール氏。そのような施設が存在し、機能して役割を果たすことが、その国の文化の成熟度を示すのだと考える。日本テニス界にミュージアムの設立は不可欠なのだ。

いろいろな展示物の中であって、1枚の写真からアジアの国から来た2人の若者が全米選手権に優勝した瞬間の驚きに満ちた歓声が聞こえてくる——そんなミュージアムの実現が望まれる。

私の宝物① 宮城淳監督采配下でデ杯戦初出場するとき 1枚の写真から思うもの

テニスミュージアム委員
元デビスカップ選手・監督
渡邊 康二



ここに1枚の写真がある。

ちょっと色も褪せたモノクロの小さな写真だ。どなたに撮ってもらったのか記憶もない。日付は1963年4月5日、場所は福岡市の東公園コート、デビスカップ対韓国戦の開会式だ。こんな古い写真であっても遠い昔の数々の思い出を蘇らせてくれる貴重な1枚であり、宝物だ。

ここから想起する数々の思いとは――



左から金斗煥、朴道成、李相凍、韓国監督。宮城監督兼選手、石黒修、藤井道雄、筆者

1. 夢へ一番乗り

大学3年生だった1962年12月、翌63年度のデ杯選手団が発表になり、監督兼選手の宮城淳さん、石黒修さん、藤井道雄さん、小西一三さんの4選手に加え本井満（関西学院大3年）、小浦猛志（関西学院大2年）と自分の3名が追加発表となった。中学1年からテニスを始めた甲南の仲間、吉田泰忠（後の全日本ジュニア15歳以下単複優勝者）、松本鐵一（後の全日本ジュニア18歳以下単優勝者、インターハイ単複優勝者）、小林功（インターハイ複優勝者、69年全日本単複優勝者、デ杯選手）、河盛純造（68年、70年全日本複優勝者、デ杯選手）らとテニス部に入ったときから「誰が最初にデ杯選手になるか」という夢見る競い合いに一番乗りできたという喜びと誇りの証明だ。

2. 宮城家での合宿

年が明けてデ杯の練習会を田園テニスクラブ（東京・大田区）で開催するとの知らせが来た。関西からの学生3人の宿泊先は何と宮城監督の田園調布のご自宅。詳しいことは記憶にないが恐らく10日間くらい宮城家にお世話になっただろう。食べ

盛りの学生3人、しかも洗濯物もどっさり。雲上人であった宮城監督の家で合宿という今では考えられない感激が蘇る。

3. 抜擢の感激

60年に初参加の韓国は、未だ日本の敵ではないとの前評判。No.1シングルスに石黒修選手の起用は固い。No.2シングルスは？ 宮城監督は若手育成の機会とランキングに拘ることなく

決断されたようだった。結局シングルスに石黒、渡邊。ダブルスは宮城・藤井組となった。デ杯出場の夢が叶ったこの瞬間の身震い感は忘れられない。

4. 宮城監督の配慮

試合前日、夕食を済ませた後、私の緊張感を見て取られたのか、宮城監督は試合前夜にも拘わらず地元の協会役員の方において選手団を福岡の繁華街へ。リラックスマードの時間で緊張をほぐして頂いたことは今でも凄く印象に残っている。デビュー戦はこうして無事乗り切ることができた。監督たるものの選手のメンタルコンディショ

ニングにはこういうことも試合前の準備の一つの方法として考えておくべきものなのだとすることを学ばせてもらった。爾来自分の監督のときも神和住君や坂井君を同じように遇した。しかしながら今の時代は日本の代表選手が国際試合前夜に繁華街に出かけたら週刊誌の標的にされる世の中だ。外出がままならない時代とメディアがそれほど発達していなかった時代ではコンディショニングの方法も自ずと異なるだろうが、勝つためには何が必要か、それを的確に把握し、常識の観念にはとらわれず信念をもって実行された宮城監督の采配を思い出す。

5. 宮城監督のミステリーゾーン

時間の空いているとき、宮城監督は常に英語の原書を読んでおられた。それはブリッジの戦法に関する解説書。一種の神格化された姿だった。後に同じく監督を務めた私にはどうしても真似のできない一面だったがそんな姿がもう見られないのは凄く寂しい。偉大な先輩のご冥福を祈る。

――どんな写真でも思い入れが多ければ多いほど宝物に変わる。

清水善造メモリアルテニスコート 群馬の誇り“善造”先輩

テニスミュージアム委員
元プロテニスプレーヤー
板橋 C.マリオ



日本テニス界のレジェンドである清水善造氏（以下、同郷で高校同窓の親しみを込めて“善造”と呼ばせていただきます）の功績を後世に伝えるとともに、子どもたちの憧れの場所になるようにとの願いを込めて、2020年7月、善造の出身地である群馬県高崎市に『清水善造メモリアルテニスコート』がオープンしました。

メインコートを含むセミハードコートが21面。サーフェスは有明コロシアムと同じデコターフで、カラーは全米オープンと同じ内側が青、外側が緑の仕様。クラブハウスには善造が愛用した道具やプレー写真、当時の大会プログラムなどの展示コーナーが設けられています。ここでは展示品の中から、私が選んだ3つを紹介させていただきます。

写真①は、善造が1921年のデビスカップから帰国の際に、同郷の税関職員に贈ったとされるラケットです。フレームにはTOKYO RACKETの刻印があり、いくつかの名場面で使用されていたものかもしれません。

写真②は、1917年に善造がアルゼンチンのブエノスアイレスへと麻袋の売り込みに出張した際、現地で開催された南米選手権に出場し、15年連続で王座を守っていた選手を破り初出場で優勝したときのカップです。この快挙は現地でも大きな話題になったそうです。

写真③は、善造が南米での商談時に携帯したとされる手帳です。高崎中学校（現高崎高等学校）時代から商社マンになることを目指していた善造は、東京商業学校（現一橋大学）を経て1912年に三井物産に入社し、インドのカルカッタ支店勤務となったことをきっかけに（硬式）テニスと出会いました。手帳は善造の商社マンとしての様子をうかがうことができる貴重な史料です。

『清水善造メモリアルテニスコート』には、ほかにも貴重な史料がたくさんあります。また、展示コーナーの隣にはカフェ『Café ぜんぶうまいぞう』が併設されており、「善造やさしい珈琲」「善造BG（ベンガル）ビーフカレー」「善造WD（ウインブルドン）ロールサンドウィッチ」といった善造のエピソードにちなんだメニューがあります。さらに、地元高崎市では『清水善造を（NHKの）朝ドラにする会』が発足して盛り上がりを見せているとのこと。新型コロナの終息後には、ぜひ足をお運びください。

■清水善造メモリアルテニスコート

住所：群馬県高崎市井出町903-1

公式ホームページ：http://takasaki-foundation.or.jp/zenzo-memorial/

写真提供：渡木秀徳（公益財団法人 高崎財団）



写真②南米選手権の優勝カップ



写真①善造ゆかりのラケット



写真③善造が南米での商談時に携帯したとされる手帳

令和2年度「特定寄附金テニスミュージアム」会計報告

令和2年4月1日～令和3年3月31日

令和2年度寄附金額（令和3.3.31まで）	2,203,500円
令和2年度末基金残高	37,889,487円

令和2年度テニスミュージアム委員会活動報告

委員会活動費	2,698,690円
--------	------------

■主な活動

歴史的資料の収集・整備・データベース化

* 新木場倉庫収納史料整理作業

* 史料寄贈受け入れ

* フィルム・ネガなどのデータ化

所蔵する史料への問い合わせ・貸し出し対応

常設ミュージアムの検討

ニューズレター発行、JT AHPテニスミュージアム更新

Webでの委員会・全体会議開催など

〈掲示板〉

（公財）日本テニス協会特定寄附金「テニスミュージアム設立に関わる寄附」へのご寄附のお願い

〔ご寄附の方法〕

①ネット決済の場合：JTAホームページ（<http://www.jta-tennis.or.jp/>）の「寄附」コーナーより、「寄附の方法」のインターネットからのお申込みはこちらボタンをクリックしてお手続き下さい（<https://fundexapp.jp/jta-tennis/entry.php>）。

②振込の場合：同封の振込用紙をご利用いただくか、日本テニス協会（Tel.03-6812-9271）まで振込用紙をご請求下さい。同封・請求の振込用紙をご利用いただけますと、郵便局・ゆうちょ銀行、三菱UFJ銀行からは振込手数料が無料です。

〔頒布物のご案内〕

デ杯「甞る田園コロシアムの熱戦」DVD、フェド杯「日本女子テニス栄光への道のり～フェデレーションカップの時代～」DVD、「全日本テニス選手権90年の軌跡」DVDをご希望の方は、下記ミュージアム委員会までお問い合わせ下さい。テニス絵葉書（3種類）はJTAホームページの「JTA STORE出版物頒布」もしくは「情報」コーナーの「出版物」よりお求めいただけます。

〔資料・情報ご提供のお願い〕

テニス史料の情報、住所・姓名の変更などはJTAテニスミュージアム委員会までメールにてお知らせ下さい。（Eメールアドレス：museum@jta-tennis.or.jp）

■テニスミュージアム委員会

委員長：吉井 栄 副委員長：中川智文

常任委員：武内 勝、後藤光将、小林やよい、越智和夫、西澤太郎、清水伸一

委員：我孫子和夫、小沢 剛、塚越 亘、渡邊康二、金森 悟、福池 泉、板橋 C.マリオ